

氏名・(本籍)	上杉 智英 (山口県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第6号
学位授与年月日	平成29年3月15日
学位授与の要件	学位規程第2条第3項該当
学位論文題目	『往生礼讃偈』の文献学的研究 —古写経本『集諸経礼懺儀』卷下を用いて—
論文審査委員	主査 教授 落合 俊典 副査 教授 斉藤 明 副査 教授 藤井 教公

論文内容の要旨

本稿は「『往生礼讃偈』の文献学的研究 —— 古写経本『集諸経礼懺儀』卷下を用いて ——」と題し、より原典に近接する『往生礼讃偈』テキストの伝本整理・紹介と古態の復元を目的とする文献学的研究である。

近年の『往生礼讃偈』研究は、法然浄土教の視座を離れ、中国仏教思想史上における善導という視座による研究を志向しつつも、そのテキストとして法然浄土教影響下における改変を経たものに依拠するという自家撞着に陥っている。この問題に対し本稿は、智昇編『集諸経礼懺儀』を介した『往生礼讃偈』の入蔵に着目し、近年の刊本大蔵経の系譜研究と日本に伝存する平安鎌倉期書写大蔵経のテキスト研究の成果を援用するものであり、具体的には日本に現存する古写経本『集諸経礼懺儀』卷下、『阿弥陀往生礼仏文』を対象として刊本大蔵経本と比較対照を行い、その祖本・系譜を明らかにすることで、より原典に近接する『往生礼讃偈』テキストの伝本整理・紹介と古態の復元を目指す。

本論の構成は以下の通り。

- 第一章 『往生礼讃偈』と『集諸経礼懺儀』卷下
- 第二章 七寺蔵 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷 —— 附 開宝蔵本の復元 ——
- 第三章 檀王法林寺蔵 中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下、並びに
金剛寺蔵 金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷
- 第四章 七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』攷
- 第五章 『往生礼讃偈』変遷攷
- 第六章 『往生礼讃偈』「如観経具説」攷

「第一章 『往生礼讃偈』と『集諸経礼懺儀』卷下」では、本研究の対象である善導集記『往生礼讃偈』とそれを全文収録する智昇撰『集諸経礼懺儀』の関係を検討した。『集諸経礼懺儀』の特異な文献的性格を明らかにすることは『集諸経礼懺儀』卷下を『往生礼讃偈』の一伝本として扱うことの是非を問うものであり、本章を第一章に据える所以である。

『集諸経礼懺儀』は本来別個の文献であった三階教の礼懺儀・浄土教の礼懺儀を卷上・下に収録したものであり、両者は本来一連の文献ではなく、また智昇の自撰でもない。撰述の契機として先行する道宣撰『六时礼仏懺悔儀』『集仏経六时行道儀』の存在が指摘でき、その撰述意図は長安を中心に盛行していた六時の礼懺儀を収録する、という開元一八年(730)当時の長安仏教の記録にあったと推測される。

以上、『集諸経礼懺儀』の重層構造を解明し、智昇による撰述意図を汲むことにより『集諸経礼懺儀』卷下を善導『往生礼讃偈』の一伝本として捉えることが妥当であることを論述した。

「第二章 七寺蔵 七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷——附 開宝蔵本の復元——」では、安元三年(1176)書写の七寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下の書誌情報を紹介すると共に、『集諸経礼懺儀』卷下、『往生礼讃偈』の諸本と本文の比較対照を行い、その祖本が散逸した開宝蔵本であることを明らかにした。

七寺本を以て直ちに善導撰述当時のテキストと見なすことはできないが、それは祖本の開版された大平興国二年(977)までの遡及を可能にするものであり、また北宋勅版の有する権威、並びに同一本文の量産が可能であることの影響力を鑑みれば、『集諸経礼懺儀』卷下の伝播を考察する上で決して等閑視されるものではないとの所見より影印・翻刻にて紹介し、系統を同じくする高麗初雕版本・再雕版本・金蔵本との校異を附した。

附章「附 開宝蔵本の復元」では、七寺本と高麗初雕版本・再雕版本・金蔵本の特性を踏まえ相互補完することで、散逸した開宝蔵本本文の推定復元を行った。これは同時に高麗蔵本(初雕本・再雕本)、金蔵本における校訂箇所比定を意味するものであり、従来、開宝蔵の覆刻、若しくは開宝蔵系統と一括され、不明瞭であった第一類内の具体的改変を解明するものでもある。

また従来、『集諸経礼懺儀』卷下は「親鸞の所覧本は何か」という問題意識から研究の俎上に上げられることが殆どであったが、そこでは親鸞在世時における『集諸経礼懺儀』卷下の将来・流布状況の整理といった基礎研究はなされてこなかった。このような現状の中で七寺本の系譜を特定し、開宝蔵本の本文を復元することは、平安・鎌倉期における『往生礼讃偈』流布状況の一端を明らかにするものであり、親鸞所引本の研究においても資するものと考えられる。

「第三章 檀王法林寺蔵 中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下、並びに金剛寺蔵 金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下攷」では、従来寺伝により荒川経とされてきた京都檀王法林寺蔵『集諸経礼懺儀』卷下が藤原清衡発願による中尊寺一切経本であることを指摘し、同系統本と比定される金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』卷下の書誌情報と併せて紹介した。両巻は細字双行表記の多用、「至心帰命礼」の冒頭に「南無」が附されるという版本大蔵経本に認めら

れない特色を共有しており、諸本との比較対照の結果、その本文は版本大蔵経本よりも京都大学附属図書館蔵建長三年刊『往生礼讃偈』に近接するものであり、唐代写本大蔵経本『集諸経礼懺儀』巻下に連なるものと推定される。檀王本・金剛寺本にみられる細字双行表記の多用は、儀礼の執行を意識したテキスト整備の反映と捉えられるものであり、『集諸経礼懺儀』巻下の唐代写本大蔵経本の実態を伝える重要な伝本との所見より檀王本を影印・翻刻にて紹介し、系統を同じくする金剛寺本との校異、並びに金剛寺本の影印を附した。

檀王本・金剛寺本『集諸経礼懺儀』巻下と京大本『往生礼讃偈』の近接は両系統が共に唐代写本テキストに由来する為と考えられ、それが開宝蔵を嚆矢とする刊本大蔵経本『集諸経礼懺儀』巻下と乖離するのは、開宝蔵開版（971—977）までにテキストの変遷が進んだか、或いは諸刊本大蔵経本開版時における校訂の為と推測される。

「第四章 七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』攷」では、安元二年（1176）から治承四年（1180）の書写と推定される七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』の書誌情報を紹介し、諸本と比較対照を行い、従来、詩律学の観点より入蔵本『集諸経礼懺儀』巻下の系譜に位置付けられてきた本書が、実際には版本大蔵経本よりも日本に伝存する『往生礼讃偈』単行本に近接するものであることを論証した。従来知られている日本に伝存する『往生礼讃偈』単行本（京大本、専修寺本、誓願寺本）が何れも法然浄土教の影響下におけるテキストの校訂（改変）により本来の韻律を保持していないのに対し、本書は同系統でありながら韻律を保持しており、法然浄土教の影響下におけるテキストの校訂（改変）を経していない唯一の『往生礼讃偈』単行本系統本として注目すべきものとの所見より影印・翻刻にて紹介した。

以上、第二章から第四章にて紹介した開宝蔵本系統『集諸経礼懺儀』巻下（七寺本）、唐代写本大蔵経本系統『集諸経礼懺儀』巻下（檀王本・金剛寺本）、『往生礼讃偈』単行本系統『阿弥陀往生礼仏文』は、何れも法然浄土教の影響下におけるテキスト改変を経していないものであり、本研究の問題意識「近代の『往生礼讃偈』研究は、法然浄土教の視座を離れ、中国仏教思想史上における善導という視座による研究を志向しつつも、その依拠すべきテキスト自体が既に法然浄土教の影響下にあるという自家撞着を内包する」を解決するテキストである。これらのテキストにより「第五章 『往生礼讃偈』変遷攷」では、諸本間における語彙の相違ではなく構成の相違に着目し、各時礼における礼数の相違、偈頌を構成する句数の相違を改変の痕跡と捉え、相互の前後関係を検討し序列化することによって『往生礼讃偈』構成の変遷過程を可視化し、原形の一端を明らかにした。

推定される構成の変遷に対し検討対象の諸本を配当した序列は一律とはならず、これは諸本が同一系譜上の前後関係として単純に配置されるものではなく、異なる系譜上に位置するものであり、その系譜が校訂を経ることによって複雑に交差していることを示唆している。本検討を通じて看取し得た諸本における改変の傾向は、『阿弥陀往生礼仏文』、開宝蔵本が比較的原形を留めているのに対し、檀王本には不規則な点が散見するが、それは系統の異なるテキストとの校訂によるものであり、唐代写本大蔵経時代における多様なテキストの痕跡を留めるものと捉えられる。専修寺本・誓願寺本は礼数の表記に関して最も整合のとれたテキストとなっているが、これは原形を保っていることを意味するものではなく、礼数の実数の改変に

則し総標・標章を改変した為と考えられる。

前述の第二章から第四章において検討した諸本の位置付けによれば現存諸本は、

『往生礼讃偈』単行本系統 『阿弥陀往生礼仏文』・京大本・専修寺本・誓願寺本
『集諸経礼懺儀』卷下 唐代写本大蔵経本系統 檀王本・金剛寺本

『集諸経礼懺儀』卷下 開宝蔵本系統 七寺本・高麗初雕本・高麗再雕本・金蔵本

と二系統に分類される。校訂本文を作成するにはまず『往生礼讃偈』単行本系統と『集諸経礼懺儀』卷下唐代写経大蔵経本系統において校勘作業をなすべきであるが、本章において検討した変遷過程を勘案すればその際の底本としては『阿弥陀往生礼仏文』が適切と言えよう。

「第六章 『往生礼讃偈』「如観経具説」攷」では、ほぼ内容読解がなされている『往生礼讃偈』の中において難読の箇所として知られる「如観経具説」を対象に検討を行った。この一句は「『観経』に具に説くが如し」と、経証として『観無量寿経』が明示されているにも拘わらず、現行の『観無量寿経』（『大正蔵』第12冊所収）には該当箇所を見出すことはできず、従来複数の解釈がなされてきた。本稿では当該箇所に対し、諸本における異文の有無を確認し、善導の著作より用例を帰納した上で、『往生礼讃偈』の当段構成における機能を踏まえ、主要な先学の解釈に検証を加えることで「如観経具説」を疑誤と判断した。この疑誤に対し先学により検討されていない「如〇〇具説」に訛誤があると仮説し、生起した訛誤を倒字と想定、逆行することにより、本来「如観経説具」（『観経』に「具」と説きたまうが如し）であったと私解を試みた。

以上の六章を通じて本研究の目的である『往生礼讃偈』伝本の整理・紹介（第一・二・三・四章）と古態の復元（第五・六章）を遂行した。本研究の大部分は具体的な校勘を始める前の主要な準備作業であり、その最終的な目的は『往生礼讃偈』校訂本文の作成にある。敦煌本『往生礼讃偈』先行研究の纏め、並びに敦煌・吐魯番・黒水城本を整理し、『往生礼讃偈』伝本の一層の蒐集に努め、校訂本文を作成することが本研究の今後の課題である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、初唐の浄土教家善導（613～681）の主著の一つ、『往生礼讃偈』（『往生礼讃』、『六時礼讃』とも称す）のテキスト本文について、敦煌本や日本流布本等の諸本に加えて従来殆ど用いられて来なかった一切経所収本を用いて原典の復元を目指したものである。

従来の『往生礼讃偈』の文献学的研究は、法然浄土教の興隆とともにその影響下で改変されたテキストを用いて論じられてきた。その後、敦煌本の出現に伴ってテキストの古態に迫ろうと種々の試みが行われたが、敦煌本には完本がなく全体的な解明には至らなかった。

本論文の著者は、テキストを中国伝存と日本伝存に分類し、前者を①一切経所収本（『集諸経礼懺儀』巻下）、②敦煌写本、③『五会法事讚』・守屋本・敦煌石室別行本の三つに分け、後者を①正倉院『聖武天皇宸翰雜集』・七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』と②浄土宗・浄土真宗相伝の諸写刊本（流布本）の二つに分けている。この内、中国伝存の『集諸経礼懺儀』巻下と、日本伝存の『阿弥陀往生礼仏文』の特長を的確に捉え論じている。『集諸経礼懺儀』巻下には中国伝存の刊本と日本古写経本とがあるが、日本古写経本の中でも檀王法林寺所蔵の中尊寺一切経本と金剛寺一切経本とが特異な形態を有しており、その解析を中心に本論文が論述されている。

本論文は序論と六章からなる本論、および結論とによって構成されている。序論では本研究の目的と先行研究の梗概、本研究の方法ならびに今後の課題が述べられている。

第一章では、『往生礼讚偈』と『集諸経礼懺儀』二巻との関係を論じている。『集諸経礼懺儀』は本来別個の文献であった三階教の礼懺儀・浄土教の礼懺儀を巻上・下に収録したものであり、両者は本来一連の文献ではなく、また智昇の自撰でもないことを指摘している。『集諸経礼懺儀』の成立とその依拠するテキストの問題を解明し、『集諸経礼懺儀』巻下を善導『往生礼讚偈』の一伝本として捉えることに成功している。

第二章では七寺一切経本『集諸経礼懺儀』巻下を取り上げ、この写本と『往生礼讚偈』諸本との比較対照を行い、その祖本が散逸した開宝蔵本であることを明らかにしている。書写底本の解明へ至る方法は精密かつ妥当であると思われる。

第三章では檀王法林寺蔵の中尊寺一切経本『集諸経礼懺儀』巻下と金剛寺蔵の金剛寺一切経本『集諸経礼懺儀』巻下に光を当てテキスト古態の迫ろうとしている。両本は、細字双行表記の多用、「至心帰命礼」の冒頭に「南無」が附されるという版本大蔵経本に認められない特色を共有しており、諸本との比較対照の結果、その本文は版本大蔵経本よりも京都大学附属図書館蔵建長三年刊『往生礼讚偈』に近接するものとの結論に至っている。そのことから両本が唐代写本大蔵経本『集諸経礼懺儀』巻下に連なるものと推定することに成功した。細字双行表記の多用は、儀礼の執行を意識したテキスト整備の反映と捉えられるものとの考察は刮目に値する。

第四章においては七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』について論述している。安元二年（1176）から治承四年（1180）の書写と推定される七寺蔵『阿弥陀往生礼仏文』の文献学的考察に依り、本書が日本に伝存する『往生礼讚偈』単行本に近接するものであることを論証した。従来知られている日本に伝存する『往生礼讚偈』単行本（京大本、専修寺本、誓願寺本）は、何れも法然浄土教の影響下におけるテキストの改訂本である。本論では、先行研究の韻律に関する論考を採用して、『阿弥陀往生礼仏文』は韻律を保持している写本とした。以上のように法然浄土教の影響を受けていない唯一の『往生礼讚偈』単行本系統本と位置付けたことは評価できる点であろう。

第五章においては『往生礼讚偈』の諸本間の構成の相違に着目し、各時礼における礼数の相違、偈頌を構成する句数の相違を改変の痕跡と捉え、相互の前後関係を検討し序列化することによって『往生礼讚偈』構成の変遷過程を可視化し、原形態を明らかにしている。但し、

敦煌本のテキスト状態から見ると、『往生礼讃偈』の成立に関しては数度にわたる編集過程があったと想定されることから本研究の校訂テキスト本をもって原形態と考察することには慎重な態度が必要であろう。今後より一層の研究の深化が求められる。

第六章では『往生礼讃偈』の中で難解な箇所、「如観経具説」について著者の新見解を提示している。この一句は「『観経』に具に説くが如し」として『観無量寿経』からの経証とされているが、現行の『観無量寿経』に該当箇所を見出すことが出来ない。

従来 of 解釈の問題点を指摘し、慎重に考証した結果「如観経具説」を疑誤と判断し、「如観経説具」（『観経』に「具」と説くが如し）であったと推定している。この新見解は、本書の精密な文献学的研究を踏まえた上で下された私案であるが、本来の校訂研究の有り様を示していると考えられる。

よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当すると認定するものである。